

地震災害時の乳幼児の親の行動に関する基礎的分析

金沢大学 理工学域環境デザイン学類 学生会員 ○村 一翔

金沢大学 理工研究域環境デザイン学系 正会員 藤生 慎

金沢大学 理工研究域環境デザイン学系 フェロー 高山 純一

1. 研究の背景と目的

近年、我が国では東日本大震災や熊本地震などの大規模な地震が多発している。災害時、自力での避難が通常の者より難しく避難行動に支援を要する人々を災害弱者と言い、それらはCWAP(Children・Women・Aged・Poor)と称される。CWAPの中でも子ども、特に乳幼児は、地震災害時に限らず自己判断力が低い。地震災害という非日常的な状況においては、より自己判断能力が低下し、自力での避難が困難となり、乳幼児を取り巻く環境下の大人の助けが必要不可欠である。乳幼児の多くは幼稚園・保育園に預けられている為、大規模地震が発生した際に親のもとを離れている可能性が高い。地震発生後、園から親への子どもの引き渡しを円滑にするために、園の地震災害時の防災対策だけでなく、親が地震災害発生後どのような行動をとるかを把握しておくことが重要である。乳幼児を取り巻く環境下の主体間における地震災害発生時の行動のギャップを明らかにする。

本研究では、石川県の認定こども園・幼稚園・保育園に子どもを預ける親を対象に、大規模地震災害が発生した際の行動や防災意識に関するアンケート調査を実施し、石川県内の認定こども園・幼稚園・保育園に子どもを預ける親の大規模地震災害時の行動に関する基礎的分析を行う。

2. 既往研究

幼稚園・保育園に子どもを預ける親の防災意識等に関する既往研究としては、松澤ら¹⁾の防災訓練への参加が防災意識に影響することを明らかにしている。また、幼稚園・保育園または教職員を対象に幼稚園・保育園の防災対策の実情に関する研究や、教職員の防災意識等に関する研究は存在するが、大規模地震災害時を想定した親の行動に着目した点を本研究の新規性とする。

3. アンケート概要

本研究では、石川県の幼稚園・保育園に子どもを預ける親を対象にアンケート調査を実施した。配布数は1627枚であり、回収数は229枚である。本アンケートでは、図-1に示すような震度7の大規模地震災害の状況を設定し、親がどのような行動をするかの把握を行った。図-2に示すような行動パターンを与え1位~3位の優先順位で尋ねた。7月と1月を1セットとし、3セットのアンケートをランダムに配布し、様々な状況において地震災害時の行動を尋ねた。状況については、「電気・ガス・水道」「携帯電話での通話」「携帯電話でのメール」「災害用伝言ダイヤル」「災害掲示板」の5つの項目において○(確実に使える)、△(使える場合がある)、×(全く使えない)の三段階のレベルより様々な状況を設けた。本研究では、紙面の都合上、3セットあるうちの1セットについて対象とし、通信環境が利用可能な状況と通信環境が利用不可能な状況において優先順位が1位の行動について集計を行った。図-3に通信環境が利用可能な状況、図-4に通信環境が利用不可能な状況を示す。

・地震の規模 震度7	・時期 7月	・時間帯 お子さんが園に居る時間	・周囲の状況 固定していない家具のほとんどが移動したり倒れたりし、飛ぶこともある。壁のタイルや窓ガラスが破損、落下する建物がさらに多くなる。補強されているブロック塀も破損するものがある。
---------------	-----------	---------------------	--

図-1 地震時の状況

行動①: 子どもを預けている園に行く 行動②: 子どもを預けている園の避難場所に行く 行動③: 子どもを預けている園に電話(通話)する 行動④: 子どもを預けている園にメールする 行動⑤: 夫(妻)に電話(通話)する 行動⑥: 夫(妻)にメールする 行動⑦: 祖父母に電話(通話)する 行動⑧: 祖父母にメールする 行動⑨: 園の災害用伝言ダイヤルを確認する 行動⑩: 園の災害用掲示板を確認する 行動⑪: 家族の災害用伝言ダイヤルを確認する	行動⑫: 家族の災害用伝言板を確認する 行動⑬: ママ(パパ)友に電話(通話)する 行動⑭: ママ(パパ)友にメールする 行動⑮: 友人・知人に電話(通話)する 行動⑯: 友人・知人にメールする 行動⑰: 職場の近くの避難所に行く 行動⑱: 自宅の近くの避難所に行く 行動⑲: 自宅で待機する 行動⑳: 職場で待機する 行動㉑: テレビやラジオで情報収集する 行動㉒: その他
---	--

図-2 親の行動パターン

電気・ガス・水道	×
携帯電話での通話	○
携帯電話でのメール	○
災害用伝言ダイヤル	○
災害用掲示板	○

図-3 通信環境が利用可能な状況

電気・ガス・水道	×
携帯電話での通話	×
携帯電話でのメール	×
災害用伝言ダイヤル	×
災害用掲示板	×

図-4 通信環境が利用不可能な状況

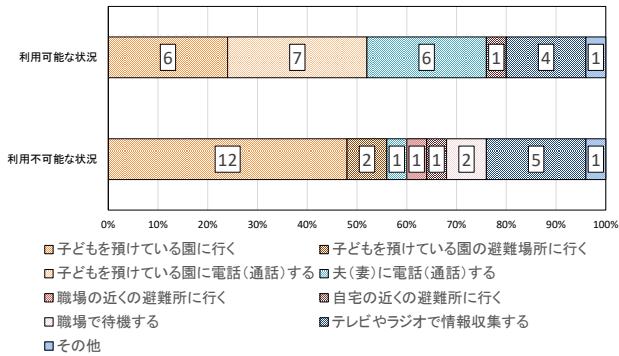


図-5 地震災害時の親の行動(7月)

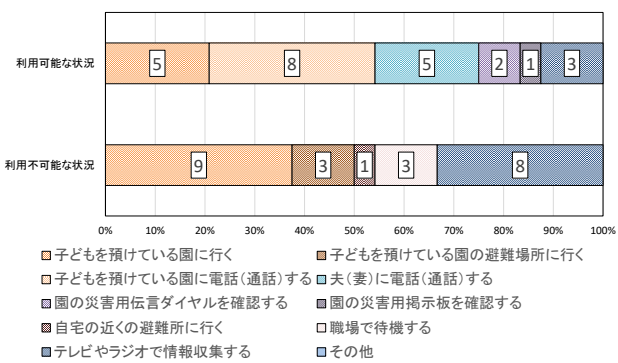


図-6 地震災害時の親の行動(1月)

4. 分析結果

図-5に地震災害時の親の行動(7月)、図-6に地震災害時の親の行動(1月)を示す。7月・1月どちらの場合においても「子どもを預けている園に行く」を最優先する割合が高いことが明らかとなった。中でも通信環境が利用不可能な状況においては、4割近くが最優先している。また、「テレビやラジオで情報収集する」は7月・1月どちらの場合においても2割近い回答がある事より、現代において情報収集は重要と考える親が多いことが明らかとなった。通信環境が利用可能な状況では、直接園に行くよりも携帯電話を用いた通話による安否確認を最優先する割合が増加することが明らかとなった。以上より季節によって地震災害時の親の行動の変化は見られなかった。

5. まとめと今後の課題

地震災害時において、幼稚園・保育園に預けられた子どもを円滑に親へと引き渡すためには、園の地震災害時の防災対策だけではなく親の地震災害時の行動を把握する必要がある。

本研究では、アンケート調査より乳幼児を持つ親の地震災害時の行動に関する基礎分析を行った。地震災害発生時には子どもの安否確認を最優先する親の割合が高いことが明らかとなった。安否確認の方法として、通信環境が利用可能な状況においては、直接園に行くよりも通話を優先する親の割合が増加することが明らかとなった。また、通信環境が利用不可能な状況においては、直接園に行くとは回答した親の割合が約4割を占めた。今後は、地震災害時の行動のみでなく、個人属性や防災意識などと地震災害時の行動を絡めたより詳細な分析を行う。

参考文献

1) 松澤明美, 白木裕子, 津田茂子: 乳幼児を育てる家庭における災害への「備え」ー東日本大震災を経験した通園時の母親への調査よりー, 東京学芸大学紀要, 総合教育科学系Ⅱ, 第63集, 2012